

# 慢性疾患患者の「地元で暮らし続けること」を支える看護を学ぶ

－総合看護学実習Ⅰ（成人慢性期看護学領域）の実際から－

山田 香・遠藤 和子

## Nursing to Support Patients with Chronic Illness Living in Their Hometowns

－ From the Practice of Integrative Nursing Practice I (Chronic Illness and Conditions)

Kaoru Yamada, Kazuko Endo

### Abstract

This manuscript reports on the practice of Integrative nursing practice I (chronic illness and conditions) at the core hospitals of the Regional Comprehensive Care. This practical training was designed by a collaboration of students, clinical supervisors, and faculty staff, who aimed to understand nursing for people who require self-care in daily life due to disease and to discuss the required nursing care considering future social needs. During the practical training, the schedule was flexibly adjusted to allow students to find and solve problems through nursing practice. We believe that the practice led to learning outcomes such as being able to understand the meaning of receiving nursing care in the home town of the patient and understand the requirements of practical nursing skills. After the practical training, we evaluated the learning contents of the course with the clinical supervisors to identify tasks for the next year and clarify the benefit for the hospital hosting the training. Furthermore, the experience of residing near the hospital during their training was a great help for students to understand how local people live, as well as their geographical and cultural backgrounds.

**Key words** : Chronic illness, Home town, Life, Nursing, Practical training

### I. はじめに

2009年度のカリキュラム改正により看護基礎教育に追加された「統合分野」では、「専門分野での実習を踏まえ、実務に即した実習を行う」<sup>1)</sup>ことが教育上の留意点として挙げられている。すなわち、統合分野の臨地実習においては、既習の知識や技術の全てを統合して現在の臨床現場で求められるレベルの看護実践を行う必要性が示されている。

近年の人口動態、疾病構造の変化により、臨床現場で慢性疾患患者に提供される医療は年々高度化かつ複雑化している。慢性疾患患者とその家族が抱える問題を解決していくためには、問題の本質を見抜き、多様な背景を持つ患者・家族との協働により、解決に向けてチャレンジする意欲と実践力とを育てることが重要であると考えられる。ここ山形県では、すでに高齢化率3割を超える市町村が点在しており、臨床現場では少子高齢化から派生する様々な問題—ケア担い手の不足、医療資源

山形県立保健医療大学保健医療学部看護学科  
〒990-2212 山形市上柳260  
Department of Nursing,  
Yamagata Prefectural University of Health Sciences  
260 Kamiyanagi, Yamagata-shi, Yamagata, 990-2212, Japan

(受付日 2017. 12. 25, 受理日 2018. 3. 20)

の乏しさ、老々介護、認認介護、さらには自治体の医療財政難一が複合的に絡み合い、立ち現れている。

今回、取り上げる総合看護学実習 I（成人慢性期看護学領域）（以下本実習とする）では、住み慣れた地域で療養を続ける慢性疾患患者とその家族を支える看護実践を学び、看護師としての問題発見能力や問題解決能力の基礎となる「患者の生活をみる」力を身につけることをねらいの一つとしている。さらに、本実習は 2016 年度より、「山形発・地元ナース養成プログラム」<sup>2)</sup>の学士課程教育として試行されており、「地元」の医療福祉を支える看護を学ぶ実習として位置づけられている。また、アクティヴ・ラーニングの観点から、実習内容を学生・臨床指導者（地元ナース養成プログラムリカレント教育受講生を含む）・教員が協働でデザインしていることも、本実習の特色である。

本稿では、本実習の実際について、開講から 3 年間の実習内容を整理し、教育効果及びそれを支える実習病院との連携を中心に報告する。

## II. 総合看護学実習 I （成人慢性期看護学領域）の概要

総合看護学実習 I は、本学看護学科 4 年次前期に開講される 2 週間の臨地実習で、学生は基礎看護、成人急性期看護、成人慢性期看護、老年看護、在宅看護、母性看護、小児看護の 7 領域から希望する領域を選択して実習を行なう。うち本実習は、新カリキュラム導入にあわせて 2015 年に開講されたものである。

総合看護学実習 I では、全領域共通の実習目的・実習目標が挙げられており、これに基づいて、各領域の対象に応じたそれぞれの領域の実習目的・実習目標が設定されている。本実習では、領域の実習目標を「生活の場において病とともにあり、セルフケアを必要とする人への看護について理解し、社会の動向を踏まえて、これから求められる看護について考察する」こととし、3 年次の成人慢性期看護学実習で学習した慢性看護特有の対象理解や看護実践を深める内容となっている。したがって、本実習では、実習目標と学生の学習関心をもとに実習施設として、透析専門病院、糖尿病専門外来、および小規模病院等を選定してい

る。これらの実習施設では、専門外来での先進的な取り組みや、過疎地域の医療資源の少なさをカバーしつつ患者のニーズに応えようとするユニークな医療実践等を学習することができる。

## III. 実習前の調整

### 1. 実習協力依頼

実習協力病院には、実習予定の前年度に実習概要を説明し、了解を得ている。

この時点での打ち合わせ内容は、大まかな実習期間と学生数、実習目的及び実習目標についてである。

### 2. 総合看護学実習 I 全体オリエンテーション （学内）

総合看護学実習 I の概要説明と実習選択については、例年、1 月に 3 年生を対象に「総合看護学実習 I 全体オリエンテーション」を実施している。学生はこのオリエンテーションを受け、希望する領域を選択し、年度末までには実習領域が決定する。

### 3. 学生の学習課題の焦点化（学内演習）

新年度に入ると実習施設との詳細な打ち合わせに先立ち、慢性領域で実習する学生全員と担当教員とで学内で実習内容の検討を行う。まず、それぞれの学生が自己の学習関心をプレゼンテーションする。次に、慢性領域の実習目的・実習目標と、各実習施設の特徴を踏まえて「この実習で何が学べるか」について意見交換を行う。ここでは、学生の議論を引き出すために、教員から以下の 4 点を投げかけている。①自己の関心がどこにあるのか、この実習を通して何を学び、何を身に着きたいのか ②それらを達成するためには、実習先で「何をみるのか」「何を体験するのか」「何をつくるのか」③その実現のために自分に必要な知識・技術はどのようなものか ④①～③が実習目標のどの項目と合致するのか、である。この議論の過程において、学生らは慢性領域の実習目標を臨床場面レベルで具体化する。そのうえで、個々の学習課題を絞り込み、実習計画を作成していく。実際の実習では、これらの学習課題や実習計画は実習展開とともに深化し焦点化されていくことになる。

学内演習の最後に、それぞれの学生の学習課

表1 実習準備～実習評価までの流れ

時期	内容
前年度	実習施設との打ち合わせ
前年度1月	総合看護学実習Iオリエンテーション(全領域) 希望領域調査
前年度3月末	実習領域決定
4月	領域別オリエンテーション 学内演習(実習計画作成)
4月末	実習施設との打ち合わせ(詳細)
5月末	実習開始
8月	実習評価会議

題・実習計画に応じて実習先を振り分ける。実際には、6～7名の学生が2～3名ずつ3箇所に分かれて実習することが多い。

#### 4. 実習内容の調整

それぞれの学生の学習課題・実習計画決定後、実習受け入れ施設との実習調整に入る。まず、学生の立案した学習課題・実習計画(動機・体験したいこと・目標)を臨床指導者に伝え、理解を得る。次に臨床指導者と教員とで具体的な臨床場面を想定しながら、学生個々の学習課題・実習計画を達成するための実習内容の調整を行う。学生が実習フィールドで卒業研究のデータ収集を予定している場合、この時点で研究協力を依頼する。

#### 5. 実習日程調整

実習日程は、学習課題・実習計画に応じた臨床場面が捉えられるような調整を行う。例えば、透析導入期の看護を学習課題とする学生の場合、対象となる患者の透析日に合わせた隔日の実習日程とし、糖尿病専門外来での患者指導を学習課題とする学生では、患者の外来日毎(3～4週間間隔)に実習日程を組むなどしている。しかし、実際に実習が始まり、臨床での学びを通して学生の問題意識が焦点化されていくと、実習内容の再調整が必要となり、実習日程にも変更が生じることもある。

#### 6. 実習指導上の留意点

実習指導上の留意点として、本実習の特性上、

学生の学習関心・課題が実習をすすめる過程で焦点化されていくことへの合意が挙げられる。臨床指導者からは、先に述べたような計画変更への協力だけでなく、それ以上に、学生自身が悩み・考え・発見する過程を見守ることへの理解を得ている。

#### 7. 事前課題

本実習の実習施設で行われている医療実践は、その特色から既習の内容ではカバーしきれない部分も多い。したがって、専門性の高い先端事例・特殊事例を理解するためのベースとなる知識について学生に事前課題を課している。その際、臨床指導者と教員とで「何をどこまで学生が事前学習するのか」「ここから先は実際の実習で看護師らから学ぶ内容とする」等を確認し、課題を提案している。

#### 8. 学生の移動・宿泊・食事の手配

実習先が遠隔地である場合は、学生の移動、宿泊、食事の調整も重要である。学生が安心して実習に集中できるような配慮が必要となる。一日のみの見学実習等の移動では、大学の送迎車や基幹病院の公用車などを使用し、学生が自家用車で長距離を運転する機会を極力減らしている。宿泊については、実習施設の協力により病院内の宿泊施設や職員寮の使用及び食事の提供を受けることもある。その他、学生本人の実家や祖父母宅が「合宿所」となることも多い。



患者が自らの生活の中で実行可能な解決策を見出していく過程を支援する実践があげられる。学生たちは、こうした臨床場面から、患者の社会的状況や生活環境を踏まえた支援が患者の主体的な療養行動につながるという慢性看護のあり方や、そこで求められる看護実践能力について考えることができた。とりわけ、看護師が、地元の消防団の飲み会の実情、冠婚葬祭の作法など患者の文化的背景を共有していることが、地域で生活する患者の生活状況を捉えるうえで強みとなることを実感していた。また、専門外来を中心に病棟（教育入院）、栄養科、他科外来、紹介先の医院等が連携する様子から、シームレスなケア提供のためのケアシステムの構築とそこでの認定看護師の調整役割の重要性を理解していた。

## ②透析専門病院

透析専門病院であるB病院の外来実習では、外来の環境設定に着目し、外来での看護援助の目的や効果を考察した。外来での患者の待ち時間を最小にするため、あらかじめ他部門と連携して栄養指導や血液検査を組み入れる工夫は、患者・家族の心身のストレス軽減だけでなく、1回の受診でいく人かの専門家からのアドバイスを受ける機会にもなり、患者の満足度や受診行動継続につながると理解できた。また、この外来では、透析導入前の患者と同年代の古参の透析患者の外来日時を合わせ、自然な形で患者同士の情報交換・ピアカウンセリングの場を創り出すことを意図している。これは、透析導入前の患者にとっての支援になることはもちろんであるが、古参の患者にとっても自己効力感や継承欲求の充足となる。その他、看護師が患者との「世間話」から、季節の食べ物や患者の趣味（登山、山菜取り、家庭菜園）、仕事（農作業の繁忙時期等）、家族状況の変化等の情報を引き出し、患者自身が「気になること」「心配なこと」、つまり療養生活上の問題を患者とともに特定し、達成可能な具体的な改善策を患者とともに導出する実践を学んだ。このような実践場面から、学生らは透析専門病院の外来看護の展開の拡がりや構造を理解することができた。

同病院の血液透析室では、「透析療法導入期の看護」を学習課題とした学生が透析導入間もない患者とその患者に関わった看護師にインタビュー

を行った。インタビュー内容をもとに学生間でカンファレンスを行い、患者視点からの透析療法の受容について考え、各部門と連携した段階的な患者指導が、導入期の患者にとって治療を受容し継続するための効果的な支援となることを考察した。その他、長期の保存期治療を経て透析療法導入に移行する慢性腎不全患者のケースでは、患者のこれまでの腎保護に留意した生活や治療への姿勢を医師・看護師らが尊重し、透析回数を週1回（本来は3回必要）から開始することを提案するなど、医療主導ではない患者中心の医療の実現に向けた関わりを学んだ。

## 2) 小規模病院での実習

### ①療養病床病棟・訪問看護ステーション

置賜地方にある小規模病院のC病院では、療養病床病棟の長期入院患者、訪問看護を受ける患者と家族との関わりから、患者・家族の生活や人生を支える多職種連携を考える実習展開となった。患者の意思・目標は、患者・家族・関係するすべての多職種が参加する医療カンファレンスで情報共有され、参加メンバーそれぞれが専門的な立場から（患者・家族も）意見を交換している。学生は、カンファレンスに参加したスタッフへのインタビューを行い、患者・家族の願いを叶えるケアを支える連携が成り立つためには、スタッフ一人一人が患者の人権と生命の安全のバランスを考え自分の実践を省察すること、お互いが日ごろから顔の見える関係にあり「誰がどのような資源として頼りになるのか」を把握していることが重要であることを理解した。訪問看護ステーションの実習では、看護師による、患者・家族への細やかな配慮や家族の不安に応える介入が、家族の介護力を支え、育てる看護実践であることを学んだ。

こうした長期的に患者に関わる療養型の小規模病院での看護は、学生にとって、地元に着目したきめ細かい看護を実践することの魅力を感じさせるものとなり、「患者に合わせていろいろな工夫ができることが楽しい」「患者さんとじっくり関わられる」といった学生たちの声が聞かれている。

### ②D町立病院・訪問看護ステーション・介護老人保健施設

過疎地域にあるD町立病院では、少子高齢化に

表 2 これまでの実習における学習課題一覧

年度	学習課題
2015 年度	マイライフ：腹膜透析患者のバック交換スケジュール作成
	腹膜透析患者の「声」：腹膜透析患者へのインタビューをもとに作成
	糖尿病患者の「呑み方」のコツ
2016 年度	山菜の K (カリウム) 含有量
	腹膜透析ごみの上手な出し方
	血液透析導入期の患者の思いと看護実践 — 導入期の患者とその担当看護師のインタビューから —
	糖尿病手帳をより使いやすくするしおりとシールの作成
	糖尿病教育入院患者へのロングインタビュー
2017 年度	嚥下体操の工夫：大型パネルの作成と実施時の職員の配置
	在宅における終末期患者への看護実践と看護師の思い ～町内に一つしかない訪問看護ステーションで働く看護師のインタビューから～ (卒業研究)
	長期にわたる援助関係の後に患者の死を経験した看護師の思い (卒業研究)
	血液透析療法を受けている高齢者の療養生活に対する思い (卒業研究)
	糖尿病教室：セルフフットケア資料作成と患者指導

よる町全体の介護力低下への取り組みについて学んだ。D 町の医療を取り巻く厳しい現状（交通、豪雪、老老介護、認認介護、財政）がある一方で、豪雪地帯特有の地縁血縁の強さや患者の経過・家族歴等の包括的な把握が、患者一人ひとりを尊重した丁寧なケアにつながることを理解した。そのうえで、現場の看護実践、施設間の連携、まちかど医療相談室の活動の意味をケアの受け手の立場と提供者の立場の両面から深く考えるに至った。こうした学びは、学生がこれまで経験した急性期病棟や専門分化された医療現場での実習とは異なり、「町民の健康は私たちが守る」という看護師らの言葉が表すような、地元で暮らす住民を最後まで支える濃密なコミュニティケアのモデルを理解する実習となった。これらのことは、学生が医療現場での課題発見・課題解決に対する看護師の役割や責務の重さを実感し、医療人としての自己の展望を描く貴重な機会となった。

### 3) 関連施設・事業の見学実習

#### ① D 町立病院「まちかど医療相談室」

D 町立病院では、町民が気軽に看護師に相談で

きる場として町内のショッピングセンターで「まちかど医療相談室」を開催している。学生たちは、この取り組みが、いわゆる「未病」の段階での支援や公的なセーフティネットから零れ落ちてしまう人たちのフォローの場となっていることを学び、「看護師が外に出かけていく」ことで地域に埋もれているニーズを見つけ出し、重症化を防ぐ介入の意図を見出すことができた。

#### ② 小規模病院内の医療相談室

小規模病院 C 病院内の医療相談室では、「地域における医療連携の実際」について地域のニーズに応じて相談員の役割と機能が変化してきた過程、現在の置賜地域が抱える医療問題の現実（＝数値）等を学習した。そこから、学生たちは「自分たちの未来をどう考えるか」という課題を意識しながら、患者とその家族、看護師へのインタビューを行った。これらの実習を通して、医療資源が潤沢ではない地域だからこそ、医療状況の変化を的確に捉え、地域のニーズに応じて医療体制を再構築していくことが必要であり、そのためには、院内外・地域間など多様なレベルでの連携が

表3 学生の実践内容

2015年度:「マイライフ」: 腹膜透析患者のバック交換スケジュール作成ツール
患者への実施前に中間カンファレンスで「マイライフ」を検討し、腹膜透析導入がQOLを低下させるのではなく、より向上できるような支援を目指すにはどうするかを議論した。「マイライフ」で患者の生活上の目標と生活時間を可視化できれば、患者は生活状況の客観視ができ、透析をどこに組み込むかを選択ができると考えた。導入1か月後の50代男性患者への実施では、患者とともにバック交換のタイミングの確認や今後回数が増えた際の想定まででき、導入前後の生活の変化・体調の変化、管理上の疑問等の表出も見られたことから、患者の主体的参加や選択の支援、腹膜透析のある生活を肯定的に受け止める糸口になったとアセスメントした。このことから、成人の学習の特徴と疾病受容の関連やナラティブ・アプローチについて体験的に捉えることができた。その後、「マイライフ」は3年次の領域実習の記録様式のひとつとしている。
2016年度:「季節の山菜とK(カリウム)値」
山形で食される山菜とそこに含まれるK(カリウム)量がわかる一覧表を作成した。例年5~6月は山形では山菜シーズンのため、腎不全患者のK(カリウム)値が上昇する。山菜取りは山形県民にとって春先のレジャーであり、収穫した山菜を親せきや友人と交換しあう楽しみもある。そうした患者の生活文化を守りつつ、食事療法をサポートするためのツールとしてカリウムの一覧表を作成し、患者・家族の栄養指導を実施した。患者・家族・栄養指導にあたるスタッフからもわかりやすいと好評であったため、他の実習施設にも資料を配布し、活用されている。
2017年度:「嚥下体操の工夫」: 大型パネルの作成と実施時の職員の配置
療養病床における嚥下体操の計画・実施を行った。学生がリハビリスタッフや介護スタッフとの多職種連携を実際に経験し、多職種とチームなることでより質の高い実践が可能になることを実感した。そのうえで、看護師がチームのなかでどのような役割と機能を果たすことが求められるかを学ぶことができた。

重要であることを理解した。

### ③サテライト病院見学 (E病院・F病院)

置賜地方の2つのサテライト病院の見学実習では、サテライト機能と役割、地域の医療の現状と課題を学んだ。E病院では、精神科医療、透析医療を担う病院としての体制維持の必要性と課題を学習し、F病院では、看取りの場における患者・家族の意思決定を尊重について考えを深めることができた。両病院が地域の現状(人口動態や医療機関の状況、患者・家族のニーズ)に合わせて地域包括病床の多様な活用を模索していることを事例紹介を通して学び、カンファレンスでは、今後の地域医療の課題として地方自治体病院の統廃合・再編後のネットワークや住民が利用しやすいシステム等を議論し、看護師に求められる能力や責務を考察した。

### 4) 学生の学習課題と看護実践

本実習の3年間の学習課題(表2)と実践(表3)は、教材を工夫した患者教育の実施(腹膜透析のバック交換、糖尿病患者の飲酒、透析患者のカ

リウム摂取)、透析導入期患者と担当看護師へのインタビュー、高齢透析患者・家族へのインタビュー、訪問看護師へのインタビュー等バラエティに富んだものであった。いずれの内容も慢性疾患とともに生活する人・家族への援助を体験的に学習し、考察を深めたことの成果となっている。

このような実習を通して、学生は実践力を培うことができた。

### 5) 最終カンファレンステーマ

実習のまとめとして、学内で最終カンファレンスを行っている。学生たちは、それぞれの学びを共有しつつ、実習で発見した慢性看護の課題について議論を展開している。以下、そのうちの2つについて紹介する。

#### ①看護師の専門性について

最終カンファレンスでは、専門外来と小規模病院の看護に共通することとして、看護師の確かな技術による毎日の丁寧なケアと患者を尊重する関わり方の積み重ねが、患者の生活を支え信頼関係を生むことが確認された。それを手掛かりに「よい

ケアとは何か?」「そのケアの構造はどのようなものか?」「患者とその家族にとってはどのような意味があるのか?」「次に発展するためには?」といった議論が展開された。議論の過程では、慢性疾患患者を取り巻く社会情勢やヘルスケア提供施設(または地域)の現状にも言及し、実習での学びを踏まえて、看護実践上の課題や多職種の中での看護師の役割から、看護の専門性について考察を深めることができた。

## ②地域医療連携の展望について

サテライト病院、医療相談室、まちかど医療相談室の見学では、患者を取り巻く環境を俯瞰してみることができ、それぞれの機能や役割、位置付けといった地域全体の医療構造を考える実習となった。特に、公衆衛生看護学を学ぶ学生は、地域の中での連携を紡ぐことにも関心が高く、地域における医療連携とそこでの看護師の役割について活発な議論が行われた。置賜地区のサテライト病院が取り組んでいる地域包括ケア病床の導入や外来の訪問看護事業所登録、透析専門病院の通院患者のサービス利用の現状など、医療依存度の高い高齢者の QOL を支えるための関連施設の役割と連携、地域資源の活用について考察を深めることができた。

## 2. 実習環境

### 1) 実習日程の調整

実習日程については、臨床指導者と打ち合わせを重ね、学生の学習課題や患者の外来日等に合わせ調整を行った。この調整により、学生が継続して特定の患者に関わることができ、対象を十分に理解したうえでの継続的な看護実践の展開が可能となった。

### 2) 指導体制

すべての実習先において、臨床指導者を中心に実習調整・指導が行われ、学生が安心して実習に臨んでいる。実習前の調整段階から、臨床指導者、施設管理者を含めて意見交換を行い、施設全体から本実習の目的・目標への十分な理解と実習計画への協力を得られるようにしている。

実際の指導では、普段の実践場面に学生を参加させ、そこで学生が感じとったことや疑問につい

て、学生と話し合いながら、学生の思考を整理している。学生が思考をうまく言語化できない段階にあっても、臨床指導者が一方的に指導や解説をするのではなく、学生の考えを丁寧に聞きとったり、学生カンファレンスの場を提供したりすることで、学生は段階を踏みながら、自己の思考を整理し、言語化して他の学生や臨床指導者、教員に伝えることができるようになっていた。こうした学生の学習状況の把握は、日々の学生と臨床指導者と教員の意見交換の場や学生が記述するポートフォリオの共有によって可能となっており、それらを実習計画にフィードバックすることで実習内容の充実を図っている。

また、実習場面で生じた指導上の困難や疑問については、なるべくその場で臨床指導者と教員が指導の方向性や実習上の取り決めを協議し、学生の実践がスムーズに行えるよう調整を重ねた。これらの調整は、学生の学習課題や実習計画ごとに内容が異なるため、その都度、状況にあわせて行う必要がある。本実習開始当初は、こうした調整が困難なケースもみられたが、臨床指導者と連携しながら様々な実習場面での調整を行うなかで、学生の学習の進め方についての相互理解が進み、3年目の実習では、臨床指導者が学生の学習の意図を理解して積極的に調整を図っていく場面も多くなった。

### 3) 実習受け入れによる病院側の利点

実習終了後の検討会議では、病院が実習を受け入れることの利点についても話し合われた。臨床指導者からは、「次は学生と一緒にこれをしてほしい」「今の臨床状況で自分たちが悩んでいることについて学生はどう考えるか」「自分たちの看護を学生がどう思うのか」といった意見がみられ、学生と実習を作っていくことの面白さ、学生の疑問から自分たちの看護を見直し新たな実践課題を見出したことなどが臨床側の利点として挙げられた。

## V. 考 察

以上に挙げたこの3年間での実習の実際を踏まえて、本実習での学生の学びは何か、それを支えたものは何かを考察していきたい。



## 1. 学生の学び

### 1) 慢性看護の不確かさにチャレンジし続ける看護師の責務を理解する

本実習を通して、学生は「生活者」としての患者を支える医療の実際を学ぶことができたと考えられる。同時に、学生にとっては、患者一人ひとりが抱える問題の違いや複雑さに、慢性看護特有の不確かさを痛感した経験でもあった。しかし、そのような現場において現場のスタッフが「患者のために」動いている様を実践とともに体験できたことは、困難な状況にあっても実践者としてチャレンジし続けていく職業的モデルを知ることとなった。さらに、看護師が多職種メンバーの一人として専門職の自分を磨き続ける姿勢に触れたことも、チームにおける看護職の役割と責務を理解し、生涯にわたって自己研鑽を積む専門職としてのあり方を考える機会となった。同時に、山形県のようなスペシャリストが少ない地域での医療体制や研修体制を考察し、省察をし続ける実践者としての職業的基盤を形成する重要な経験ともなった。実習後半では「患者のために何をするか」を今まで以上に真剣に考える学生の姿勢がみられた。

### 2) 地元を知ることの強みを理解する

3年間の実習内容をふりかえってみると、本実習の特徴として、地域密着型の看護実践に着目してきた点が挙げられる。それぞれの実習施設で展開されていた地域密着型の、患者の生活体験を十分に理解したうえでのケアは、まさに「看護師のアイデンティティは『病院』にあるのではなく、『地域』にあるという考え方」<sup>3)</sup>に即した実践であるといえる。このような実践の基盤には、人々の暮らしを支える地域や文化を理解と、生活者としての人間理解の深化がある。地元の文化・生活を共有する看護師だからこそ、医療者と生活者の両方のフレームを持っていることが患者・家族の意思決定の文脈に添えるスキルになっていることを学ぶことができた。学生たちがこうした「地元を知る」看護師たちの実践を目の当たりにしたことが、「患者が住み慣れた地元でケアを受ける意味とそこで求められる看護実践能力を実体験から理解できた」という学習成果を導いたと考えられる。とりわけ、大学から遠方の実習地では、その地元で実際に生活体験をしたことが、人とのつながり

方(高齢者を中心に遺されている気遣いや温かさ)、地理的条件、地域資源、地域特性の理解を大いに助け、患者理解や看護実践、課題発見に大きく影響したと考える。

### 3) 看護のコアとなるものの再発見

本実習では、専門外来と小規模病院での実習が展開され、いわばスペシャリストとジェネラリストの看護を学ぶ内容になっている。しかし、学生たちは、どちらの看護においても毎日の丁寧なケアが患者の生活・生命を支えていることを実感していた。特に基本的な生活援助の質が患者のQOLに直結することやコミュニケーション技術が援助の質を高めることを患者の反応から直に学び、「やっぱり基礎看護技術が大事だった」と自己の実践を省察することができていた。学生が高度かつ複雑な慢性看護の現場で「基礎看護技術の重要性」を再確認できたことは、内田のいう「専門を深め、それを統合させることで本当の基礎が得られる」<sup>4)</sup>ことであり、「統合分野」の実習が目指すところであると考えられる。

多職種連携に関する学生の考え方にも変化がみられた。これまでの学習から、学生たちは多職種連携はお互いの専門性を生かしてより質の高いケアを実現するための方法であることは理解していた。しかし、本実習の臨床現場では、小規模だからこそ、専門性が高いからこそ、よりよいケアを実現するために、自分たちだけで抱え込まずに広く連携する必要性が高まることを理解した。最終カンファレンスでは、連携の方法にこだわるのではなく、連携は何のためにするのか、その成果は患者に還っているのかといった援助の目的を見失わないことが重要であり、そのための連携方法については臨床現場の医療者たちが試行錯誤しながら構築していることを確認することができた。

## 2. 学びを支える実習環境

すべての実習地において臨床指導者を中心に調整・指導体制が整えられ、学生が安心して実習に臨むことができた。学生が現場の実践の中で自己の課題を焦点化していけるようなフレキシブルな調整により、学生の課題に合わせた実習が実現できている。これは学生が自己の関心を探求していくうえで重要な支援であり、実習成果に繋がるも

のであった。このような調整には、実習病院全体の实習への理解と臨床指導者の協力が不可欠である。

直接的な学生指導にあたっては、学生自身が疑問を発見し、それを解決しようとする過程を臨床指導者・看護師が見守ったことが学生の主体的な学びにつながったと考える。臨床の看護師にとっては「当たり前のこと」にたどり着けずに右往左往する学生の様子は、非常にじれったいものであるが、看護師がここで学生なりの答えを待てずに先に説明をしてしまうと学生は途端に考えることをやめ、「看護師の解説を聞く姿勢」に終始してしまう。そのため、本実習では、看護師の実践について学生から質問があった際には、すぐに「答え」を解説せず「どうしてそこに着眼したのか」「なぜそのような実践になったと考えるか」を逆に学生に質問し、適度に悩ませる・考えさせている。学生が取り組んだ山菜のカリウム値の学習課題も「春になるとやっぱり患者さんのカリウム値が高くなるんだよね」という看護師のつぶやきに学生が質問した際に、逆に看護師が「なぜだと思う？」と投げかけたことが課題の焦点化のきっかけとなった。吉村は自らが実践している医学生・研修医への在宅医療教育に関して「現場に身を置き、まず体験して感じることで、その中で出てきた気づきや疑問などを臨床指導者や仲間と共有しながら言語化し、自分の中に落とし込んでいく作業を繰り返すことで成長する」<sup>9)</sup>としている。本実習では、学生が体験した臨床場面を学生・臨床指導者・教員が共有しながら意見交換し、「今、学生たちは〇〇について考えようとしている」といった学生の学習状況について、調整を図りながら実習内容にフィードバックしている。こうした取り組みが学生の学習関心・課題を深めていくためには重要であり、学生自身が学んだこと、考えたことを他者に伝える力を養い、言語化によって自身の成長を確認することがさらに学習意欲向上につながっていたと考える。

看護スタッフだけでなく他部門・多職種からの熱心な指導も、それぞれの実習施設で展開される、専門性や地域の文化的背景を踏まえた医療実践の特色と全体像を捉えるうえで効果的であった。その際に学生に提供される丁寧な資料も専門的な内容を理解するための支援となっていた。

実習中、学生は自己の学習課題を元に患者・家族・看護師・多職種ら様々な対象に質問しているが、こうしたインタビューが可能になる背景には、一つは、患者・家族が学生を快く受け入れてくださるだけの患者・家族と臨床との十分な関係性があるからであり、それらは日頃のケアの賜物である。また、看護師をはじめとする医療者たちは、自分の実践に自信や手応えを持っている。そのため、学生が現場に入り患者と関わることに責任を持つことができ、かつ学生に自己の実践を語ることができたと考える。さらには、次の医療の担い手としての「看護学生」への期待が熱心な指導につながっていた。

### 3. アクティブ・ラーニングとしての総合看護学実習Ⅰの効果

慢性疾患患者とその家族が抱える問題を解決していくためには、問題の本質を見抜き、多様な背景を持つ患者・家族との協働により解決に向けてチャレンジする意欲と実践力を育てることが重要である。本実習では、それらの力を養うアクティブ・ラーニングの観点から、「患者の生活をみる」力を育成するための実習を学生・臨床指導者・教員が協働でデザインしている。実習前の学内演習では、実習目標と学習課題を整理し、その達成のための具体的な臨床場面を想定した実習計画を作成しながら、概念・具体の上り下りを行っている。これによって実際の実習の現場で何を確かめたいのかをより明確化することができる。さらには、自分たちで議論を尽くして構成した学習課題・実習計画であるため、自分たちが何を目指してこの臨床場面にいるのかを見失わないことももう一つの効果であった。実際、目標や計画を反芻しながら実習に臨んでいる学生らの様子がみられた。

また、今年度は、実習期間内に3人の学生が卒業研究の調査を行った。学生は、フィールドワーカーとしても現場に入ることになり、これまでにない濃厚なインタビューデータが得られた。実習展開においても、学生が研究課題を持ちながら実習を行うことは、自らの疑問を解決しようとする積極的な実習態度につながったと評価された。いわば、実習と卒業研究の相乗効果がみられた。

いずれの実習先においても、普段の実践そのままのところに学生を投入している。学生が現場で

出会う状況は実習前に計画した実習内容に沿えないことも多い。しかし、そこから学生は自己の実習目標・学習課題・実習計画を見直し、修正せざるを得ないことに気づいていく。つまり、現場に学習課題をあわせていく(=患者にあわせていく)ことになる。こうした実習のあり方が「患者が住み慣れた地元でケアを受ける意味とそこで求められる看護実践能力を実体験から理解できた」等、混沌とした慢性看護の現場の中から学生が学習の成果をつかんだ手ごたえにつながったと考えられる。

## VI. おわりに

2017年10月に発表された、新コアカリキュラム<sup>6)</sup>では、4つの大項目の一つに「社会と看護学」が挙げられている。新カリキュラムにおいて本実習をどう位置付け、どう展開していくかは、今後の課題である。よりディープに地元を知ることができるような仕掛け(民泊、祭りへの参加等)や実習で体験する実践を理解するための学内講義の充実を検討している。実習病院の看護の実際については、「山形発・地元ナース養成プログラム」の協力病院でもある実習病院の看護部長、臨床指導者が講師として学内講義を担当している。その成果として小規模病院での実践に興味を持ち、看護師としてのキャリアモデル、看護師としての地域創造について考える学生も増えてきている。今後も充実した実習展開が図れるように実習施設と協働しながら、学内講義および実習環境を整えていきたい。

利益相反の有無:本論文について他者との利益相反はない。

## 引用・参考文献

- 1) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム—「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標—. 2011.
- 2) 山形県立保健医療大学・看護実践センター「山形発・地元ナース養成プログラム」平成28年度活動報告書. 2017.
- 3) 長江弘子, 保科英子. “地域”で暮らす患者の生活を支える看護とは①. 看護展望. 39(8). 2014; 7: 62-71.
- 4) 内田勝雄. 統合の学識によるサイエンス・ミニマム教育. 山形保健医療研究. 13. 2010; 1-6.
- 5) 吉村学. 地域の中から見えてくるものを大切に—置き去り・お泊まり・ハタケ実習—. 保健医療社会学論集 26(1). 2014; 14-18.
- 6) 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム—「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の習得を目指した学修目標—. 2017.
- 7) 稲垣絹代, 佐和田重信, 永田美和子, 八木澤良子. やんばるの特性を生かした小規模多機能施設での在宅ケア実習. 看護展望 39(5). 2014; 4: 28-33.
- 8) 新沼星織. 地域を守る医療ガバナンスの課題—山形県小国町における公立病院改革への対応を事例に—. 農村計画学会誌. 32(1). 2013; 72-81.

## 要 旨

本稿では、地域包括ケアの拠点病院をフィールドとした総合看護学実習Ⅰ（成人慢性期看護学領域）について報告する。この実習では「生活の場において病とともにありセルフケアを必要とする人への看護を理解し、社会の動向を踏まえてこれから求められる看護について考察する」を目標に「患者の生活をみる」力を育成するための実習を学生・臨床指導者・教員が協働でデザインしている。実習中は、学生が看護実践を通して問題発見・問題解決できるよう、フレキシブルに実習計画を変更している。その結果が「患者が住み慣れた地元でケアを受ける意味とそこで求められる看護実践能力を実体験から理解できた」等の学習成果につながったと考える。実習後は、臨床指導者らと実習内容を評価し、次年度への課題、実習受入による病院側の利点を明確化した。また、病院周辺での宿泊体験は、学生がその土地での暮らし方や地理的背景・文化的背景を理解する大きな助けとなった。

**キーワード：**慢性疾患 地元 暮らし 看護 実習